

# RAILWAY & CINEMA

フェデリコ・フェリーニの名作「道」ではなく、ユルマズ・ギュネイ監督のトルコ映画の「路」である。こちらも一九八二年のカンヌ映画祭でグランプリを受賞した骨太の傑作である。ユルマズ・ギュネイは、七〇年代末から八〇年代始めにかけて軍政をひくトルコにおける強固な反体制自由主義者であり、たびたび投獄されており、この作品と共に彼の代表作である「群れ」（一九七八年製作）は、獄中から指導し、演出を行っていたことと知られている。この映画も脚本は自ら執筆しているが、獄中からの指示により、他の監督が撮影を代行したようである。なお、ギュネイは、一九八四年、四十七歳の若さで亡くなっている。

物語は、約一週間の仮出獄が認められた囚人がそれぞれ家族や故郷を目指す中、その中の五人の男たちの仮出獄中のエピソードを描いたものである。封建的な家長制等による古い秩序と厳しい軍事統制の中で苦しむ民衆の姿が五つの挿話という形で重厚に表現されており、イランの場合もそうであるが、中東の反体制映画作家の質の高さを示している。五つの挿話の中で三つの出来栄は、出色である。一人の囚人の場合は、裏切り者と

## 鉄道と映画 — 32

仮出所を許されて故郷へ向かう5人の囚人。  
トルコ各地を舞台に男たちのドラマが始まる。

YOL

「路」



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済学、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション (FC) への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

して自分を狙う義理の兄の家族のところに、自分の妻子を引き取るために、一方その友人は、入獄中に不貞をはたらき、妻側の実家に監禁中の妻を殺すために、それぞれ妻の実家に向かって、船、バス、鉄道を乗り継いで旅するのである。三つ目の挿話に現れる男は、シリア国境近くの少数民族の出身であり、自由を夢見て故郷に戻るが、軍による厳しい弾圧を目的に、反政府闘争に参加する。他の二つの挿話も、旅の途中で軍に拘禁されたり、男女交際に対する厳しい慣習に厳しい自暴自棄的に反抗したりする暗い内容のものであり、民衆にとつて出口のないような当時のトルコの社会情勢が良く映し出されている。

公開当時最も印象的なシーンとして話題になったのは、不貞を働いた妻を凍死させるため、雪原を男とその息子が軽装の妻を連れて歩く場面であった。この場面が、非人間的な秩序を表象するような厳しい自然を背景に、妻に対する愛情と憎しみの板ばさみになっている男の心情を現しているという意味で、映画の一つのクライマックスであり、大変良く出来たシーンであることは間違いない。これに加えて、今こそ中東随一の新興国と言われているが、当時は真正銘の開発途上国であったトルコの雑然とし、生活感溢れる鉄道を舞台にした数々のシーンも負けず劣らず強い印象を与えている。特に仮出獄中の旅で深刻な問題を抱える囚人の不安感、観客にヒシヒシと伝わるものがあり、また家族を連れての逃走中に古い道徳観の固まりのような乗客に苛まれる場面は、トルコの当時の世相をリアルに現している。これらのシーンは、雪原のシーンと同様に映画の中で重要な役割を果たしている。筆者には鉄道を主要な背景に使ったことがこの映画を成功させた要因の一つであるように思われる。

「路」は、脚本、演出、演技、撮影共に優れているだけでなく、当時のトルコの社会を見事に表現した作品であり、見応えのある映画である。従って、欠点というほどの欠点は見当たらないが、あえて言えば、一週間という限られた時間内に同時展開した五つの挿話であるため、一つの挿話の展開中に他の挿話が次々と導入されるので、若干物語の展開が分かりにくくなることである。残念ながら日本ではまだDVDが発売されていないので、何らかの機会があれば、是非お見逃ししないようにとお勧めする。